

(鹿屋市大浦町中ノ丸)

**位置と環境**

標高70mのシラス台地北東端にあり、中ノ原遺跡と向かい合う台地に位置している。

**調査の経緯**

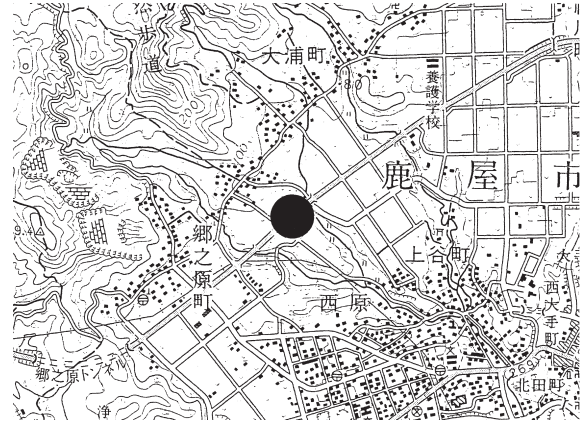
一般国道220号鹿屋バイパスの建設工事に伴い、1985（昭和60）年から翌年にかけて県教育委員会が発掘調査を実施した。

**遺構と遺物**

弥生時代を主体とする遺跡で、ほかに縄文時代の遺物や近世の掘立柱建物跡・集石土坑などが発見されている。

縄文土器は前期の轟式・曾畑式土器、後期の指宿式・市来式土器、晩期の入佐式土器がある。石器には打製石鏃・磨製石鏃・磨石・敲石・凹石・石皿がある。遺物はいずれも少量の出土であった。

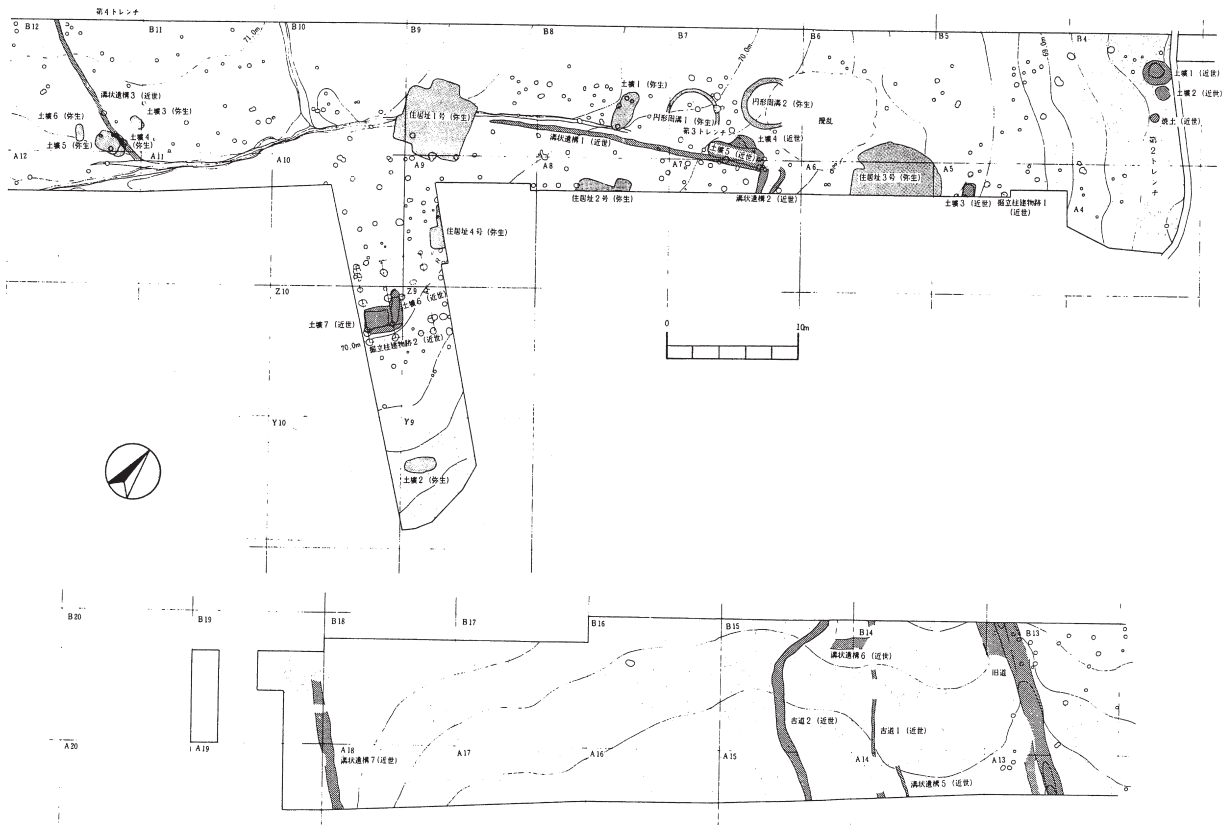
弥生時代では、中期末から後期初頭の遺構・遺物が発見された。遺構には竪穴住居跡4軒・掘立柱建



第1図 中ノ丸遺跡の位置

物跡1棟、円形周溝2基等がある。

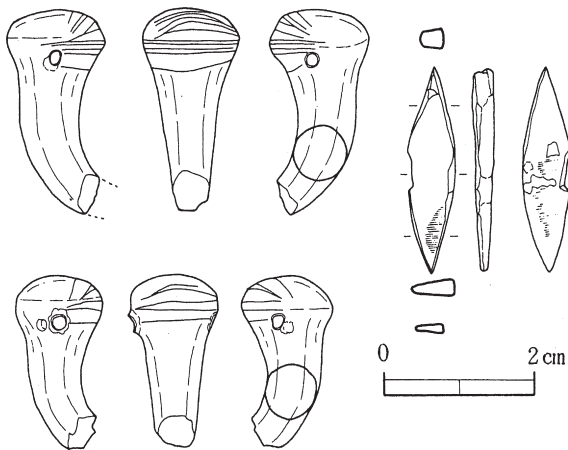
竪穴住居跡は、調査区域外へ延びているものが多く、全形が判明したのは1軒（1号）のみであった。1号は、3辺にベッド状の張り出し部を設けた方形基調のもので、中央に2本の柱穴と炉穴状の土坑がある。ほかの2軒（2，4号）も1号に類似した形態を有するものと想定されるが、3号は直径6.8mの円形を基調とする大型のもので、ほかとは違いが見られる。



第2図 遺構配置図



写真1 1号竖穴住居跡



第3図 1号竖穴住居跡出土の遺物

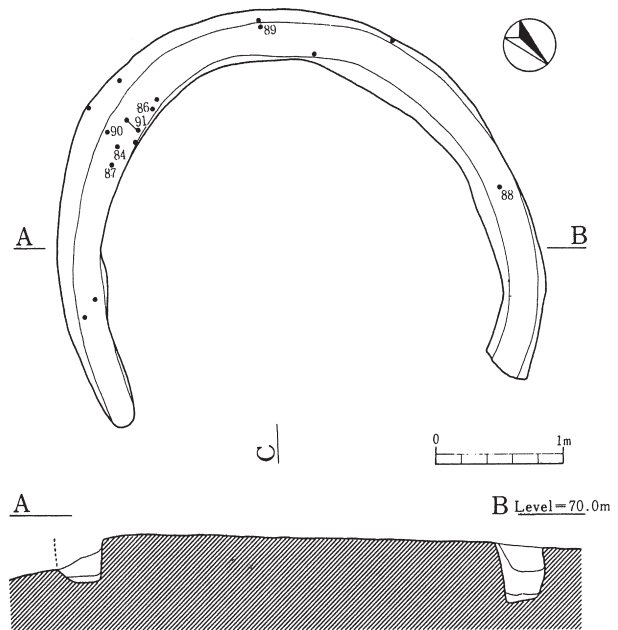
掘立柱建物跡は、梁行2間(1.8m+1.8m)が確認されたが桁行は不明である。2基検出された円形周溝は、いずれも完全なリング形での検出ではないが、復元径約4mあり、周溝の幅は1号が18~25cm、2号が30~50cmであった。

土坑7基は形態により4タイプに分けられるが、機能についてはいずれも不明瞭である。

遺物は、山ノ口土器の甕形・壺形土器を中心に、磨製石鏃や凹石・砥石などの石器が出土した。甕形土器の口縁部は「く」字形を呈するものが中心であるが、逆「L」字のものも少量見られた。

遺物で注目されるものとして、1号竖穴住居跡から出土した土製勾玉2点がある。いずれも頭部に数条の細線がみられ、いわゆる「丁字頭」の勾玉である。また、同住居跡からは磨製石鏃の製品や未製品、軽石加工品等も出土した。

近世の遺構は、掘立柱建物跡2棟以上や土坑6、



第4図 2号円形周溝状遺構

溝状遺構6、古道3、柱穴などが検出された。多数の柱穴で構成される2号掘立柱建物跡は調査区外へ延びる可能性もあるため、最終的な形状は特定できないが、底の付いた建物跡であることは確かである。

土坑には多数の礫や焼土・灰が密集してみられる火葬場的な遺構と考えられるものや、杯や茶家などが出土した墓的機能の考えられるものもみられた。近世の遺物の中には、陶磁器のほかにかんざしや硯なども見られた。

#### 特徴

- ・竖穴住居跡や土坑・円形周溝等からなる弥生時代中期末~後期初頭の集落跡である。
- ・竖穴住居の形態に円形と方形があり、性格の違いが注目される。
- ・近世の建物や土坑などの配置、出土品なども注目される。

#### 資料の所在

出土遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターに保管されている。その一部は上野原縄文の森展示館に展示されている。

#### 参考文献

鹿児島県教育委員会1989「中ノ丸遺跡・川ノ上遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財発掘調査報告書』(48)

(前迫亮一)